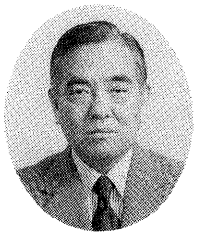
巻頭言

学際領域への発展に期待

相　磯　秀　夫†



情報は人間の知的活動の源泉であり，社会の変革とその発展に大きな役割りを果している．本学会が創立以来 30 年の間に，3万人を超える会員を抱える大きな学会に成長した背景はこの事実を物語っているといってよい．

しかし，最近の本学会の発展ぶりを眺めてみると，日本経済と同じように，その成長は一段落し，曲り角にきているような気がする．現に会員数の頭打ちが目立つし，学会の諸活動も活発ではあるが，新味という点において常識の範囲内に留まっているように見える．その一方では，学会の研究活動の報告によると，非会員の参加希望が増えているという．また，本学会が主な対象としている領域を越えた分野，例えば人文社会系において，情報との関連で多くの興味ある話題が提供されていることがうかがわれる．

情報は未知の領域との接点で意味をもち，価値を生み，もともと学際的な性格を備えている．最近，科学技術政策を審議する科学技術会議で，人間の立場を重視する新しい科学技術分野「ソフト系科学技術」の推進を提言しているが，その提言は従来の個別学問を横断的にとらえた学際的な問題解決アプローチの必要性を指摘している．これからの科学技術は，コンピュータなどのハードウェアだけに留まらず，人間自身や社会組織にまで対象を広げた分野を確立すべきことを示唆している．具体的には，人間の知的活動の支援・個人や組織の知的生産性および独創性の拡大・生活環境と社会の快適性の向上・国際的な社会経済の予測・人間と科学技術との調和などに関連する諸問題の解明と新しいパラダイムの構築の必要性を述べている．

このような人間の特性の理解に基づく諸問題を追究するためには，幅広い領域にまたがる学際的な研究が必要であるが，恐らく情報がその触媒として重要な役割りを果たすと考えられる．換言すれば，少くとも当面，情報科学がその橋渡し役を果たすべきといえる．

学際領域はソフト系科学技術だけではない．理工系は言うに及ばず，人文社会・芸術・医学等のあらゆる学問分野で同種の問題が提起されている．しかし，正直いって，そのような学際領域をどのように扱ったらよいか戸惑っているのが現状である．

本学会の一部の理事がすでに指摘しているように，学会活動の対象を情報処理に関する理論・ハードウェア・ソフトウェア・応用だけに限っていたのでは現状を大きく超える発展は望めない．この際，学会は対象領域の拡大に努めるべきと考えている．もちろん，このことは従来の対象領域を軽視することではない．それらは本学会の中核としてますます発展するものと確信するが，本学会は他領域に対してもオープンな姿勢をとることが大切なことを意味している．

学際領域の活動が理解され，本学会の特色の一つになるまでには，それなりの努力と時間が必要である．学会誌での解説・パネル討論・研究会活動などを通して，地道に会員の理解を求めることが大切である．

本学会は対象とする情報が備える性格からいって，他の学会に見られない，幅広い領域から興味ある話題を数多く提供する，最も規模の大きな学会に発展する可能性を秘めている．

（平成4年12月15日）

† 本会副会長　慶應義塾大学